

国友鉄砲鍛冶 上

江戸時代を通じ鉄砲生産の中心地として知られた国友、この地で鉄砲づくりが始まったのはポルトガルから種子島に鉄砲の伝来した翌年のことといわれています。江戸時代中期鍛冶自らが書いた『国友鉄砲記』は、その起りについて「天文13(1544)年2月、將軍足利義晴が管領細川晴元を通じて国友村の鍛冶善兵衛らに鉄砲づくりを命じた。約六ヶ月後、六匁目玉筒二挺を完成。これが国友鉄砲鍛冶の始まりである」と述べています。この天文13年開始の真偽はともかくも、鉄砲が伝わってからきわめて短期間の内に、今まで身につけていた鍛冶技術を応用し、鉄砲づくりをお

こなったことは事実でしょう。

以下国友鉄砲鍛冶の技術的地盤、繁栄ぶり、鉄砲づくりそのものについて記してみます。

湖北の製鉄遺跡

1985年1月23・24日両日の朝刊は木之本町古橋製鉄遺跡出土のようすを大きく写真入りで伝えていました。近江の製鉄に関する史料としては、『続日本紀』の大寶三(703)年九月辛卯条に志紀親王が近江国の鉄穴をもらったなどの記載があります。また考古学資料としては数多いとはいえませんが、重要な製鉄遺跡がすでに確認されています。

木之本町古橋製鉄遺跡は新たに例証を加え



木之本町古橋製鉄遺跡

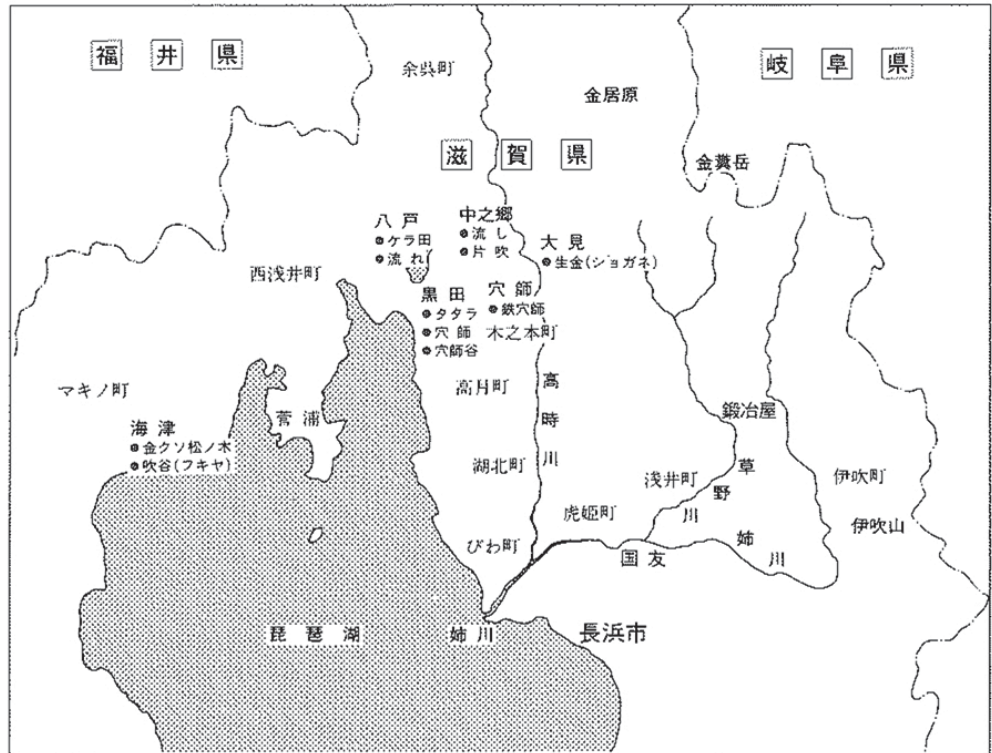
たわけですが、湖北において製鉄がおこなわれていたであろうとの推測はなされてきました。古橋製鉄遺跡周辺には金鷲岳のほか、伊吹山金居原などの製鉄に関連する山名・地名があり、鉄滓を採集したという話をよく耳にしたりするからです。

なお鉄滓は金クソともよばれますが、砂鉄もしくは岩鉄をとかす際に、鉄鉱石・炉の壁・混合物・燃料などの諸成分がくっついてできた製錬滓のことで。製鉄遺跡を調査する時は鉄滓の果す役わりは重大でこの分析値によ

って鉄の原料が岩鉄なのか砂鉄によるもののかの判定基準になります。古橋製鉄遺跡の出土鉄滓は岩鉄によるものらしいという見解でしたが、そうであれば、すでに確認されたほかの製鉄遺跡と同じ方法がとられていたことになります。

古橋製鉄遺跡は6世紀後半の須恵器の平瓶の出土によって最古の製鉄炉跡と推定され

湖北の製鉄関係地名

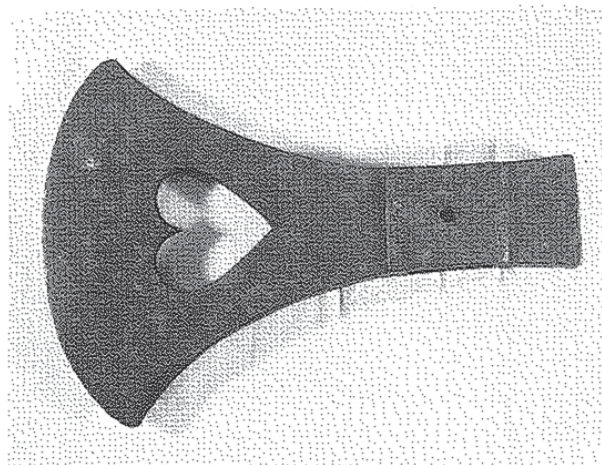


『続日本紀』天平宝字六（七六二）年二月甲戌条には惠美押勝が浅井・高島の二郡のカンナ鉄穴を賜ったとの記載が見える。鉄穴は鉄の原料—岩鉄を採取するところ—と考えられ、鉱山技術者である鉄穴師もいたろう。湖北にはこのほか、鉄製造を示すタタラ、伊吹、刃金の材料鉄であるケラなど、製鉄に関係を持つと推定される地名が残っている。

ていますが、今後周辺部の発掘や、鉄滓の分析によってより厳密な裏付けがなされることでしょう。

湖北の鍛冶たち

古橋製鉄遺跡によって湖北の地で古代より岩鉄を材料とした製鉄がおこなわれていたことを確認しましたが、次に湖北に残る鍛工品のいくつかを見ながら、湖北の鍛冶たちにつ



入峯斧（鶏足寺蔵）



入峯斧（鶏足寺蔵）

いて考えてみましょう。

木之本町古橋の鶏足寺己高閣には天平末から平安初頭の作である薬師如来を始めとして多くの寺宝が蔵されています。ややもすればこれらの文化財に目を奪われがちですが、この中に修験者が入峯のとき使った斧が二口含まれています。実用性に重きを置いたもので飾り気のない型式は鎌倉時代のものでしょうか。

浅井町野瀬から天吉寺川に沿って上ると山頂に大吉寺跡があります。白雉元(650)年開基の伽藍は、浅井氏の時焼失、往時には先達が人々を率いて登山することも多かったのでしょう。大吉寺講中と細く刻まれた入峯斧が伝わっています。これを作った宗延という人物は草野鍛冶の草分けの1人といわれますが、柄の差し口の飾り鋸、猪目まわりの丁寧な縁どりなど鶏足寺の入峯斧に比べてずいぶん装飾性に富んでいます。

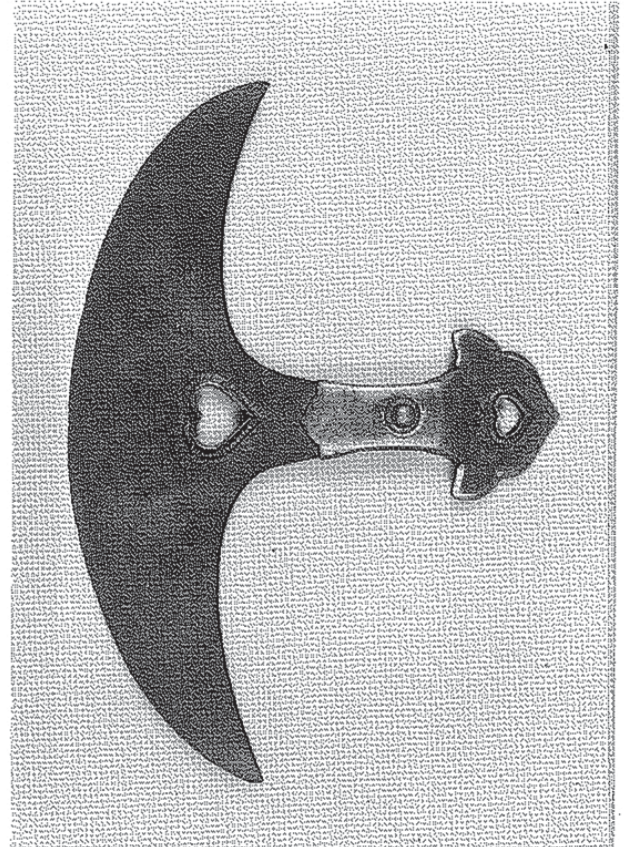
この草野鍛冶は源頼朝により大和国宇多郡草野村より召されたと伝えていますが、以後鍛冶職の集落として繁栄、秀吉の時代には多くの槍を作ったようです。鍛冶屋村の名は天正15(1587)年の土地売却文書の中に見えますが、明応3(1494)年の入峯斧の年紀、その洗練された手法、鶏足寺の斧二口などから考えて草野鍛冶の成立はかなりさかのぼることができるのではないのでしょうか。

またその技術面からみれば戦時には槍・刀などの武具、注文があれば入峯斧のような寺社に関連するもの、平時には鋤・鍬の類をうつというように需要に応じて幅広い技術をふるっています。

国友鉄砲鍛冶の繁栄

古橋製鉄遺跡、入峯斧の両面から湖北の地にすぐれた製鉄および鍛冶技術のあったことをみてきました。こうした技術的地盤があってこそ新兵器鉄砲の受け入れ、製作も可能であったといえるでしょう。

さて鉄砲が伝わってから10数年で数万挺も



入峯斧 (大阪 数田正治氏蔵)

作られたと思われる国産銃は、合戦史の中にもしばしば登場するようになります。なかでも特に有名なのが織田信長の鉄砲隊で、天正3(1575)年の長篠の合戦では三千挺とも千挺ともいわれる大量の鉄砲が使用されたといわれます。この鉄砲がどこで作られたかについては確証はありませんが、永禄11(1568)年に直轄地とした「堺」と、天正元(1573)年浅井氏滅亡後秀吉におさめさせた「国友」が注目されます。

以後、国友鉄砲鍛冶は、秀吉・三成・家康と関係を結びつつ発展していくわけですが、最も好況にわいたのは、慶長9(1604)年から元和元(1615)年にかけての11年間、すなわち家康が大坂城攻めを決行するまでの期間です。

驚くべきことに3匁筒から一貫目筒まで11種類におよぶ各種鉄砲が533挺以上の多きにわたって作られました。この大量発注によって、国友村は鍛冶集団の大組織となり、最盛期には70余軒の鍛冶屋と500人をこす職人がいたといわれます。

鉄砲製作の技

さて国友の鍛冶たちが、天文12(1543)年、鉄砲伝来以降きわめて短期間でその製作技術を習得、天下に国友鉄砲の存在を知らしめたハイ・テクニックそのものに注目し探してみたいと思います。

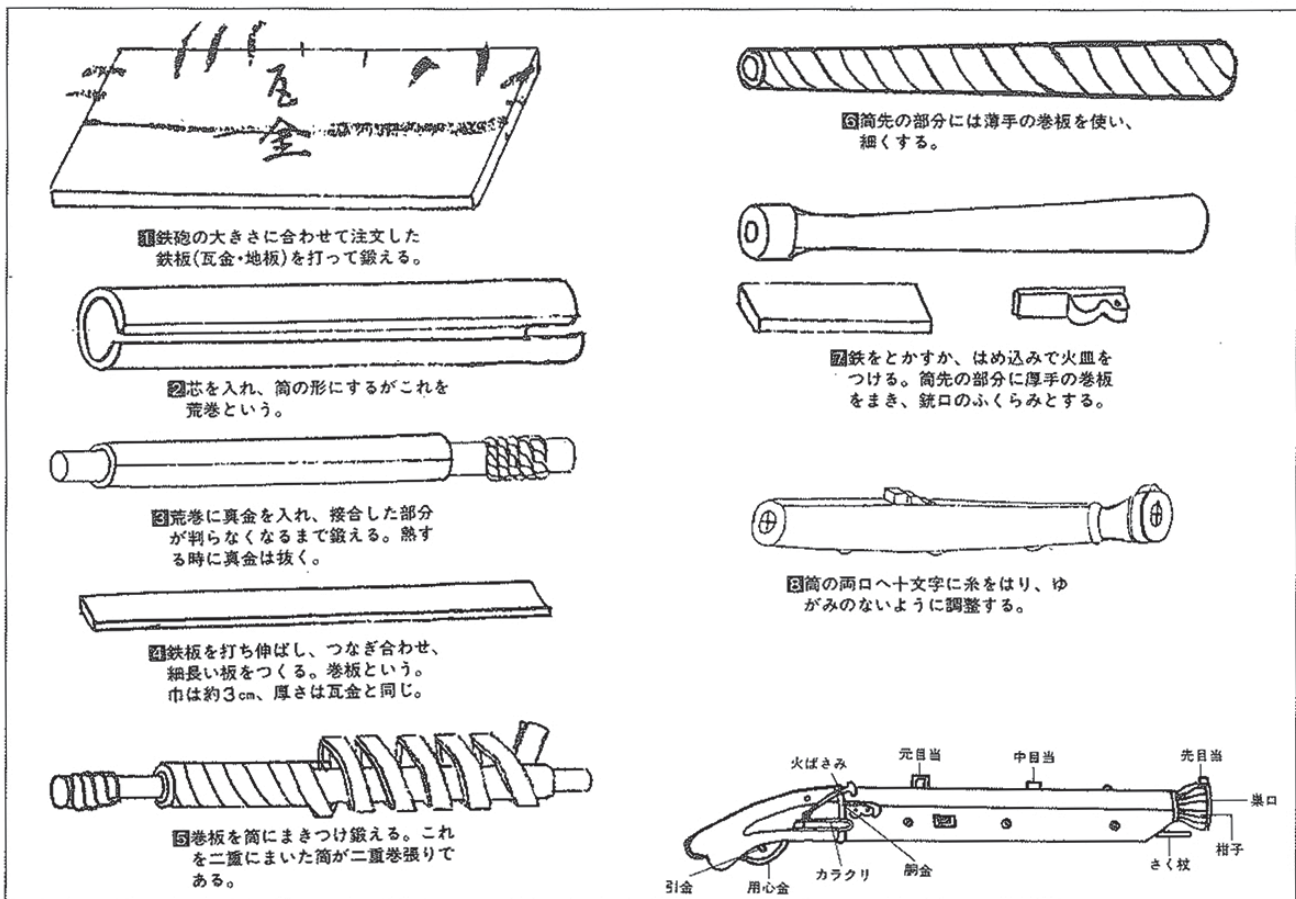
『国友鉄砲記』には鉄砲製作の苦勞がネジを中心に語られていて、銃身の張り立てなどについてはふれていません。これはすでに高水準に達していた刀鍛冶などの技術を応用すれば、巻張りなどの作業は容易だったのでしょう。難しかったのはやはりネジ製作、特に雌ネジを銃身内にどのようにして刻み込むかであったようです。鉄砲によっては、ネジを使わず直接ふさいだものも残っていますが、発射後内部に残る鉛弾滓や、火薬の燃えかす、不発弾の処置などを考えれば取りはずしは不可欠です。では国友鉄砲鍛冶はどのような方法で雌ネジを刻んだのでしょうか。現在残る道

具から判断すれば、ネジカタを赤熱した銃身内部にネジ込み、はずす作業を繰り返したもののようです。

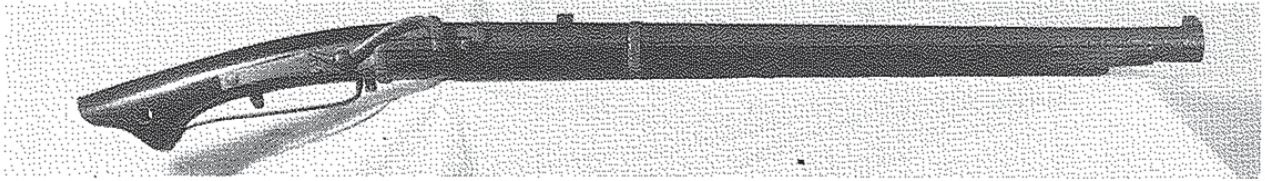
ネジ切りのすんだ銃身には^{かんにゅう わかしづけ}嵌入か沸接どちらかの方法で火皿がとり付けられました。嵌入ははめ込み、沸接とは金属材料を融かしてくっつける方法で強度にすぐれています。両目当も同様の方法でおこなわれました。

でき上がった銃身は銃床を製作する台師に回されます。銃床の材料は白樫が最も多く使われました。

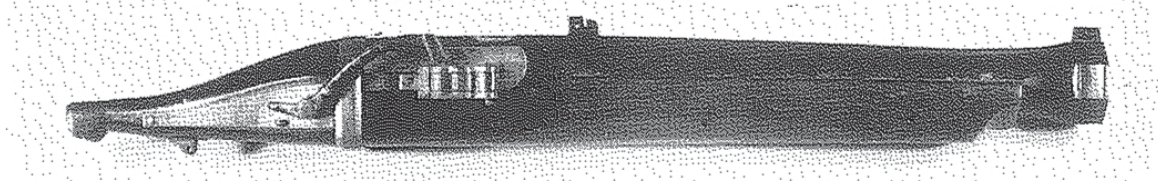
銃身に火薬と弾丸をこめただけでは発射できず点火する装置が必要になります。和銃の場合、カラクリとよばれる火縄式点火機を銃身に備えています。国友では金具師が取り付けをおこないました。カラクリは型によって4種に分けられますが、国友鉄砲にはゼンマイ内カラクリが多く見られます。このように国友においては最低3段階の分業を経て完



銃身の作り方および火縄銃部分名称図



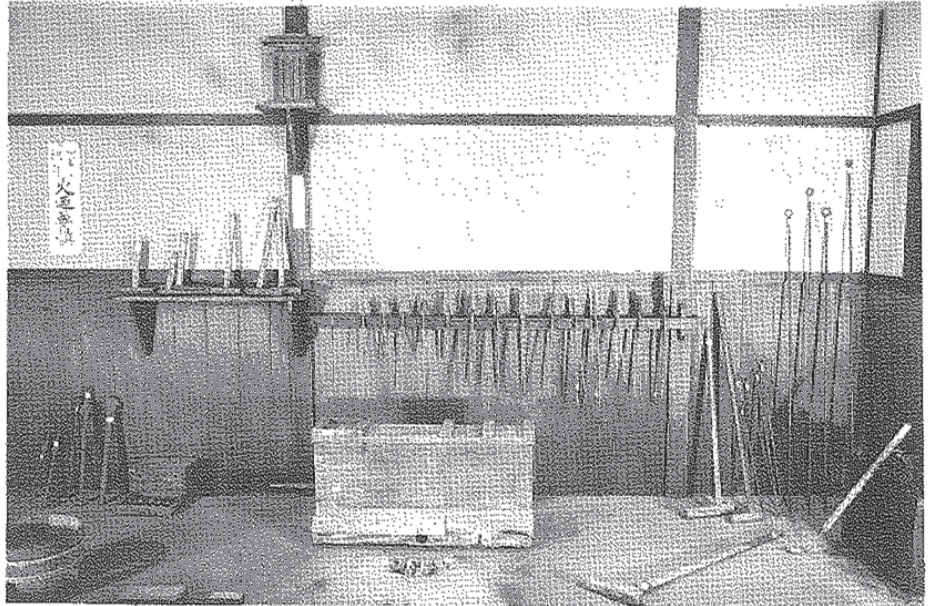
火縄銃（中筒） 銘 江州国友丹波大掾橘宗俊 江戸時代前期（国友昌三氏蔵）



火縄銃（大筒） 銘 文政十丁亥歳秋八月 江戸時代後期（国友昌三氏蔵）
江州国友藤兵衛能当
国友源重郎充雄

成したわけです。

さて鉄砲製作の中でも特に重要な銃身、一体どのような場所で作られたのでしょうか。残念なことに今日私たちはそれを見ることができません。しかし幸いなことに、国友には全国で唯一というべき鉄砲鍛冶道具が残っています。加えて各地の鍛冶場、職人尽絵等を参考に長浜城歴史博物館で鍛冶場の模式構成がおこなわれました。

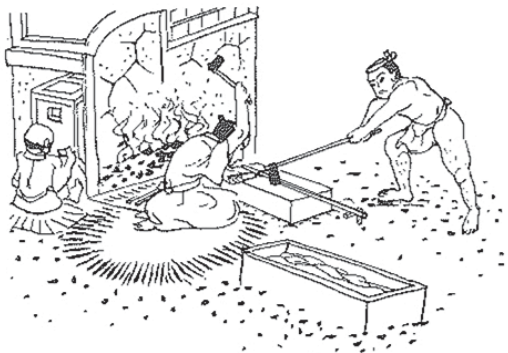


国友鉄砲鍛冶場模式構成

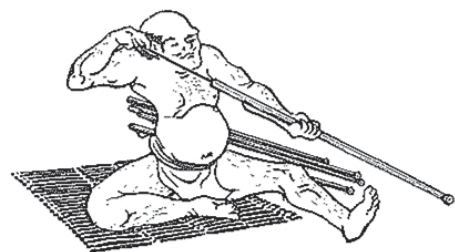
中央にはフィゴが置かれ壁面には赤熱した銃身をはさむハシ、それを打つ槌など使い勝手のよいように整理されています。また鍛冶

場には必ず、火の神様として稲荷の小祠を祀っていて、国友鉄砲鍛冶の流れをくむ家では今でも11月8日をフィゴ祭として稲荷に供え

鉄砲鍛冶の仕事ぶり

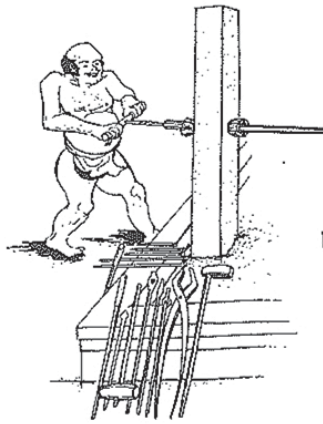


① 鍛える
鉄を打ち、筒の形にする。

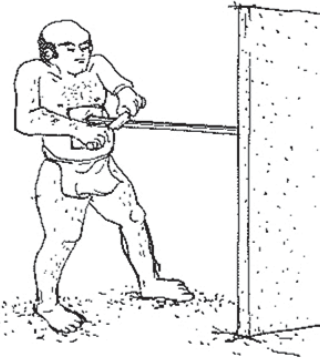
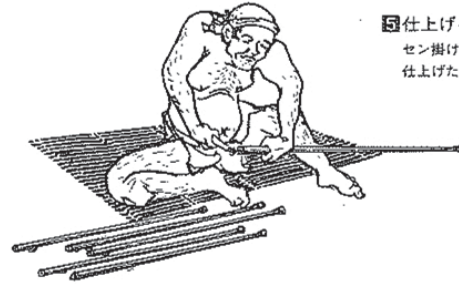


② ひずみを直す
果直しといい、曲がりなどを直す。

④内側を磨く
荒揉みといい、モミシノを使って
中を仕上げる。



⑤ネジを合わせる
銃身の底はネジでふさぐ。



⑥仕上げる
セン掛けといい、銃身を八角に
仕上げたりする。



⑦運ぶ
仕上がった銃身は銃床を作る台師へ
まわされる。

ものをします。

国友鉄砲鍛冶の技術的展開

江戸中期以後、鉄砲の注文も減少、幕府の緊縮財政の影響もあって国友は次第に活気を失っていきます。その中で鍛冶たちは鉄砲づくりの技術を他の分野に応用、活路を見出していました。

銃身にほどこした象嵌の技術は、曳山の飾り金具を生み、火薬の製造・調合技術は花火づくりに生かされるなど国友鍛冶はその技術を生かすよう模索し続けました。

やがて幕末に優秀な元込式銃が欧米より輸入、それに伴って大量生産を目的とした新技術も導入、伝統的な手工業にたよる国友鉄砲鍛冶もその使命を終えました。

(中島誠一氏提供)



花火の陣屋(入口)



鍍金台輪飾金具(阿吽の獅子)
銘 一貫齋充倅
舟町組蔵